

優秀賞

「創造する・挑戦する」
—ミツキと歩む私の道—

宮城県農業高等学校 三年

川井 つむぎ

息が白くなる朝、彼女は子を助けようと必死だ。子は深い溝に落ち、立ち上がることも抜け出す力も残っていない。今にも小さな命の灯が消えようとしていた。

物心ついた時から生き物が好きで動物園が遊び場所だった。中学生になると農業高校を舞台とした「銀の匙」という漫画を読み、主人公が動物と関わりながら成長する姿に憧れて「牛部」がある農業高校へ進学を決めた。

入学後、牛舎に足を運ぶと驚きの光景があった。「牛部」の先輩が手際よく、搾乳、給餌、除糞を行い、泥一つない美しい白黒のホルスタインが凄然と並んでいたのだ。こんな綺麗な牛達を見たことがない。私はすぐに入部し、その日からパンケーキを食べる女子高生とは程遠い日々が始まった。

私には夢がある。共進会で牛を引くリードマンとなりチャンピオンになることだ。共進会とは牛の美人コンテストで骨

格の美しさを競う大会だが、リードマンと呼ばれる人と牛が共に歩き、骨格を綺麗に見せて人牛一体となることが必要だ。入部して1か月後、私はミツキという子牛の担当となった。ミツキの性格は臆病な為、攻撃的で他の部員は近づきもしなかつた。一番苦労したのがリードの練習だ。思い通りに動かず、走りながら足を踏まれて怪我をしたこともあり、私もミツキが苦手だった。

4か月後、頑張りが認められミツキと共に県の共進会に出場が決まった。ミツキには「寄り足」という致命的な癖があり、勝つためにはリードで癖を隠さなければならぬ。

大会が始まり審査員の目が集まる中、ミツキと歩き始めると、恐れていた寄り足になり結果は6位。ミツキに対する苦手意識が伝わったのだろう。自分の技術力と信頼関係の無さが招いたことは明らかだった。牛舎に戻ると、ミツキの背中に顔をうずめて泣き続けた。

この日を境に、雪の降る日も台風の日も牛舎に赴きミツキと共に過ごした。桜が咲く頃には信頼関係が生まれ、他の部員に懐かなくても私の前では落ち着き、自他共に認めるミツキの専属リードマンとなった。

ミツキの顔を優しく撫でてあげると手が口の中に入る時がある。中はブツブツ触感で、ヨダレだらけになるが私は気にしない。毎朝、牛舎で除糞を行うと髪や制服に匂いが染み込

む。教室に行く、「臭い、近づかないで」と友達に言われて、嫌な思いをしたが、辞めたいと思ったことは一度も無かった。何故ならミツキの耳はお日様で干した布団の様な香りがして大好きだからだ。今ではこの匂いこそが誇りであり、私のシンボルだと胸を張れる。

1年の月日が流れてミツキとの2回目の共進会のチャンスが訪れた。ミツキのお腹の中には新たな生命が宿り、身体がふつくらしている為に大会では不利だったが、ミツキ以外をリードする気にはなれなかった。

審査が始まるとミツキと私の目が合い、信頼する心が伝わってきた。寄り足もリードによってカバーし、2位という大躍進を遂げたが全国大会には手が届かなかった。大会が終ると涙が頬を伝っていたが悔しくは無かった。心を通わせた30分に感動した嬉し涙だった。

それから6か月後、ミツキは初めての出産が近づき身体は更にふつくらして乳房も張ってきた。そして、私にとって忘れられない日を迎えることになる。

息が白い朝、いつもの様に牛舎に向かうとミツキの様子がおかしい。首輪が食い込みながらもしきりに後ろを気にしていた。ミツキの視線の方に目を向けると、深い溝に子牛の耳だけが見えて最悪の状況が頭を過った。明らかな早産だ。泥だらけの子牛を引き上げると体温は落ち、震え続けほとんど

動かない。「死んじゃう」と思い、太陽が当たる場所に連れて行き、藁でさすり続けた。どれくらいの間が経ったのだろう。少しずつ震えが無くなりミツキの下へ子牛を連れていくと、泥だらけの身体をミツキが舐め始めた。すると小さな声で子牛が鳴いた。「もう大丈夫」。やっと安心した瞬間だった。

私は子牛にスピニーと名付けミツキと同様に愛情を注ぎ続けた。性格が母親に似て臆病なため、他の牛よりも餌を食べることが出来なかったが、今では全日本共進会デューリー賞の候補牛として選出されるまでに成長した。

ミツキは話すことが出来ず、糞、匂い、鳴き声、行動、五感全てを通して私に語り掛けてくる。今では牛と心を通わせることができるようになった。ミツキと出会う前の私は人見知りで、目標も無く、空っぽな人生だった。ミツキが私の人生を変えてくれた。共に歩んだ坂道を一步、一步登ることで一筋の光が将来への道を照らしている。来年からは畜産の大学に進学し、将来は日本一の牛群を束ねる酪農家になることが新たな夢。

朝日が昇る青空の中、ミツキと共に広大な大地を風のように走り抜けよう。お日様の香りを感じながら今日も私は進んでいく。